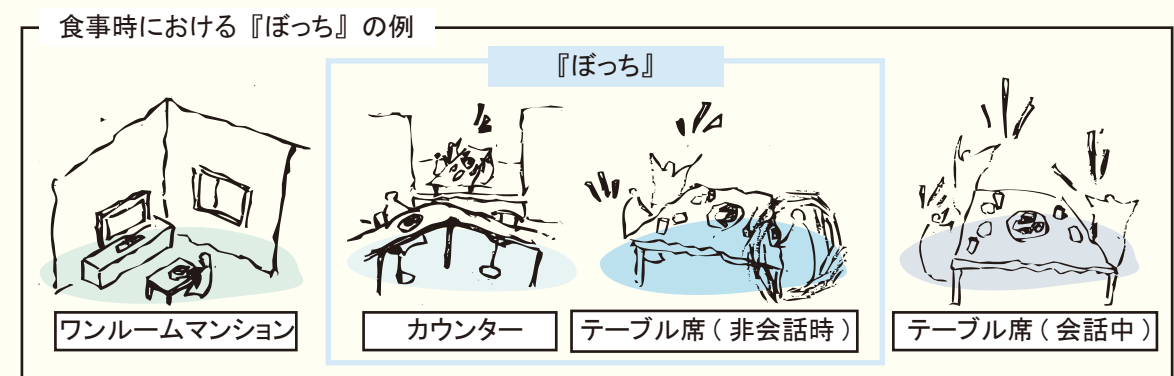


# 遭遇するぼっちーず

町にあるパブリック空間は、ワークショップや〇〇教室などグループでの活動の受け皿として機能しており、ひとりでふらっと立ち寄り時間を過ごせたり、活動している人たちをひとり眺めて楽しんだりする空間の余白に欠けている。そのため、町の公民館のような施設に、ランドリーやガーデニング、日曜大工など日常的な行為ができる空間を併設する。その上で、ひとりでふらっと立ち寄り、ランドリーする人たちや集団で活動する人たちを、眺めたり、楽しんだりできる、おひとりさまの空間（ぼっちのための空間）を、点在させ、それらが、日常的に遭遇するコミュニティのあり方を、提案する

## 本制作における『ぼっち』とは



社会学者の南後由和は著書「ひとり空間の都市論」において“孤立”が客観的な状態であるのに対し、“孤独”は主観的な状態と説明されている。孤独は他人との関係によって生じるものであり、否定的にも肯定的にも捉えられることがあると述べられている。本設計では孤独を好む個人を肯定的に捉え『ぼっち』と定義する。

## 集団性の違い

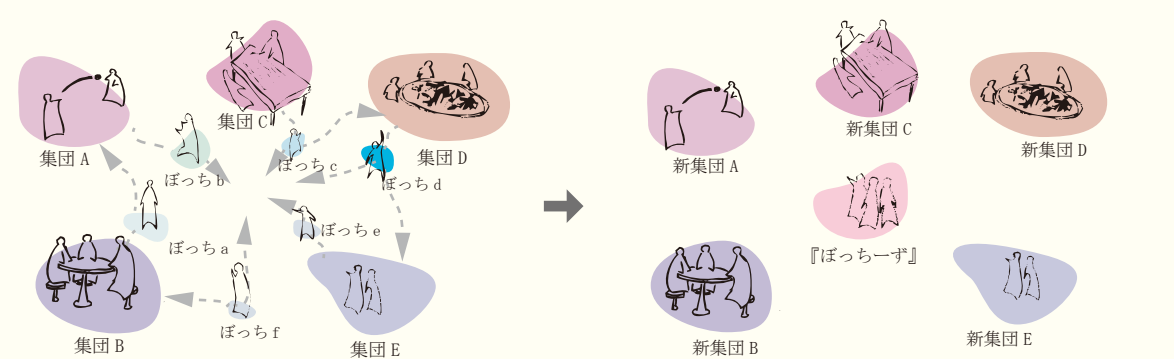
## ひとり空間からひとり空間へ



集団には他者からみた見かけ上の集団と自身からみた帰属集団があり、前者は一定の空間内にいることによって後者と違って個人同士の認識がなくとも集団に見える。これを**ぼっちーずの状態**であると言う。

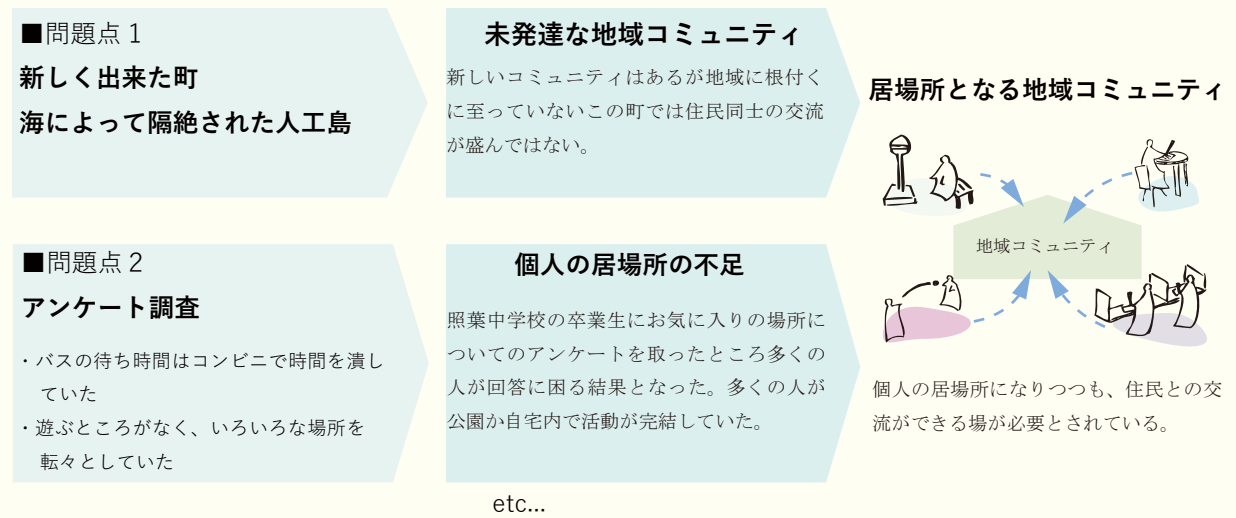
ひとり空間にいる人が別のひとり空間に興味を持ち**転々と移動**することで、偶発的に集団に参画し、新たなコミュニティや新たな活動の発展を促進することが出来る。

## 遭遇する『ぼっちーず』

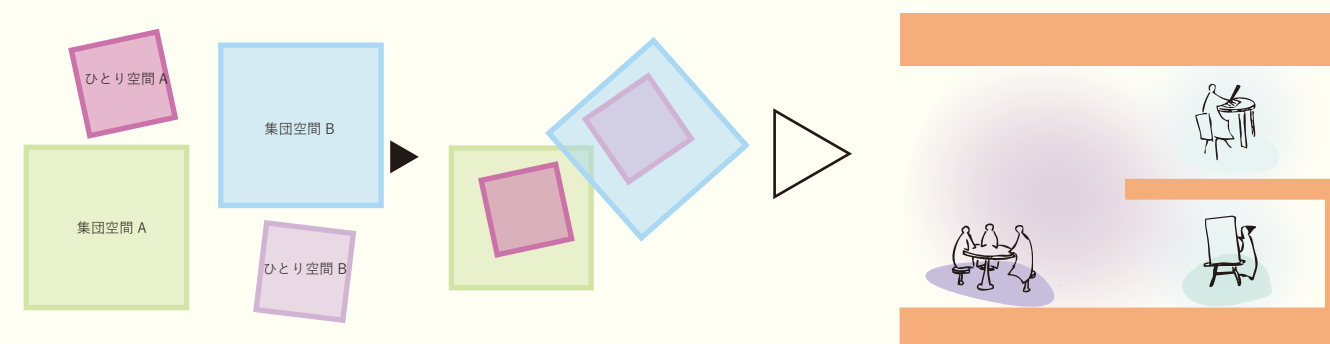


ひとり空間と集団空間が互いに干渉し合うことによって、利用者が別の空間や活動に興味を持つ。そうすることによって、集団から出てきた『ぼっち』や外部から入った『ぼっち』が他の集団や他の『ぼっち』と**遭遇**することで**新たな集団や活動を育む場を作ることを目的とする。**

## 対象敷地の問題点ー福岡市東区香椎照葉アイランドシティー

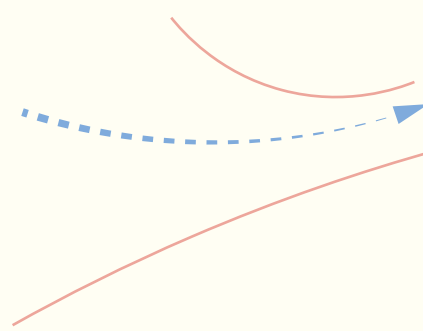


# Main



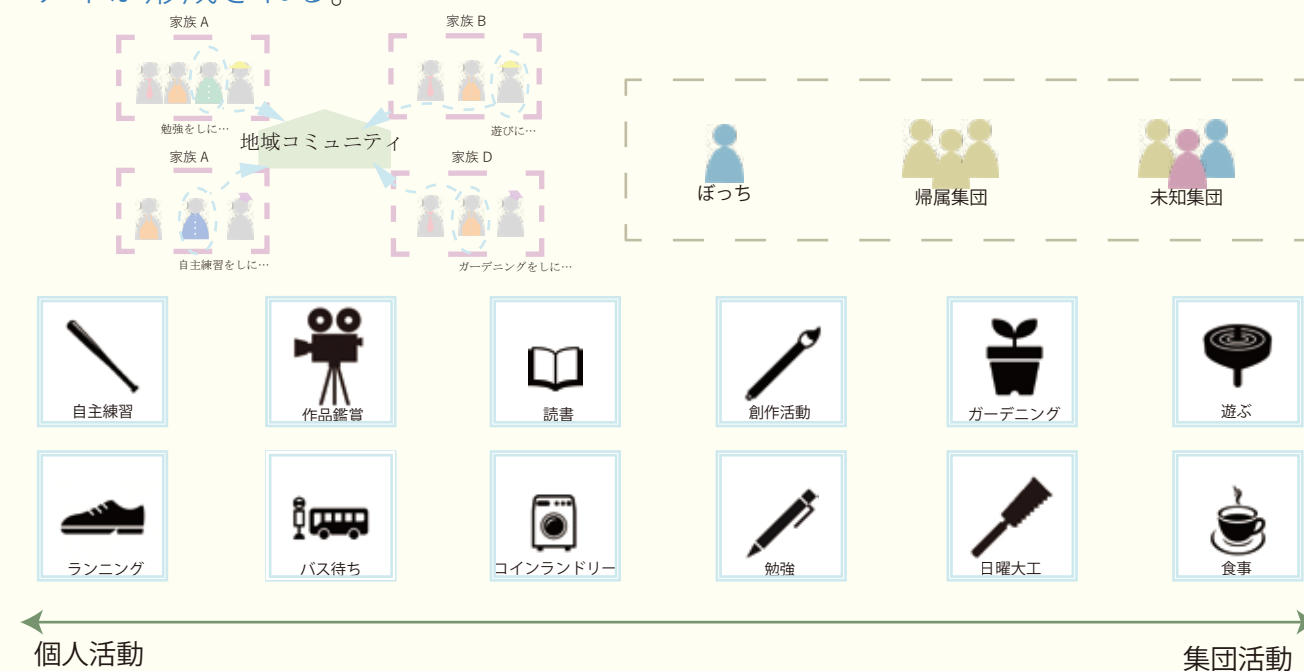
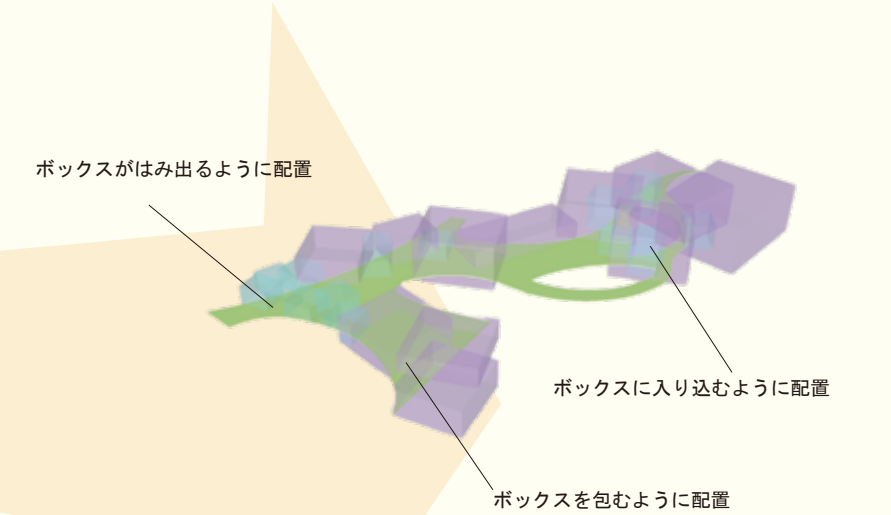
集団空間の中にひとり空間を入れた入れ子の建物をいくつか配置し、1 階では集団とひとり空間の距離を近づけることでひとりと集団を行き来しやすくする。逆に2階のひとり空間は行き来しにくい、吹き抜けを通して空間を共有し、ひとりと集団を緩やかに繋ぐ。

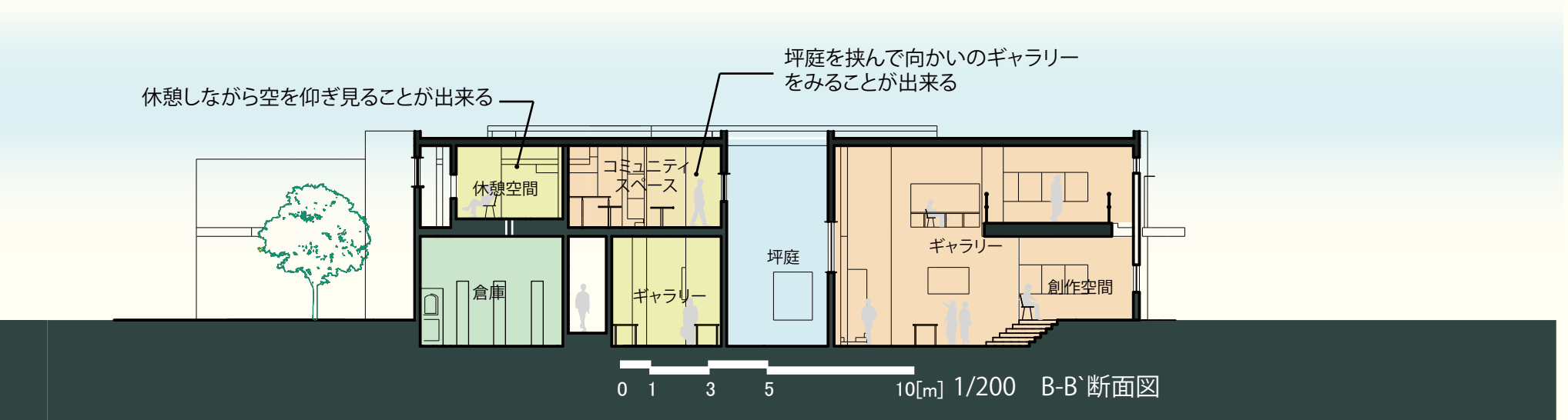
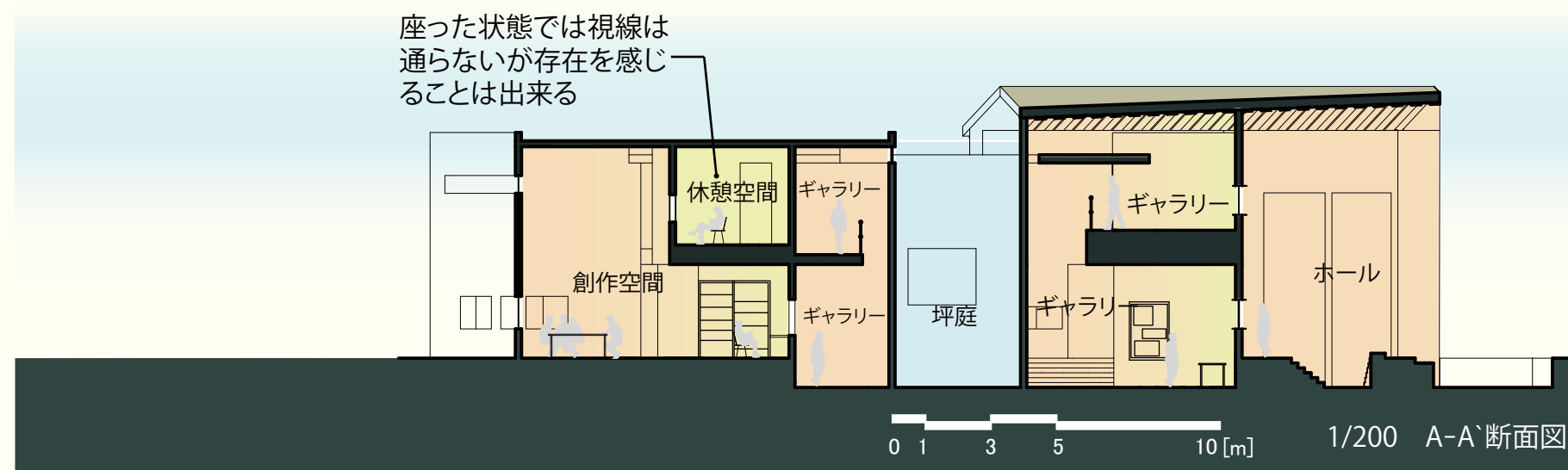
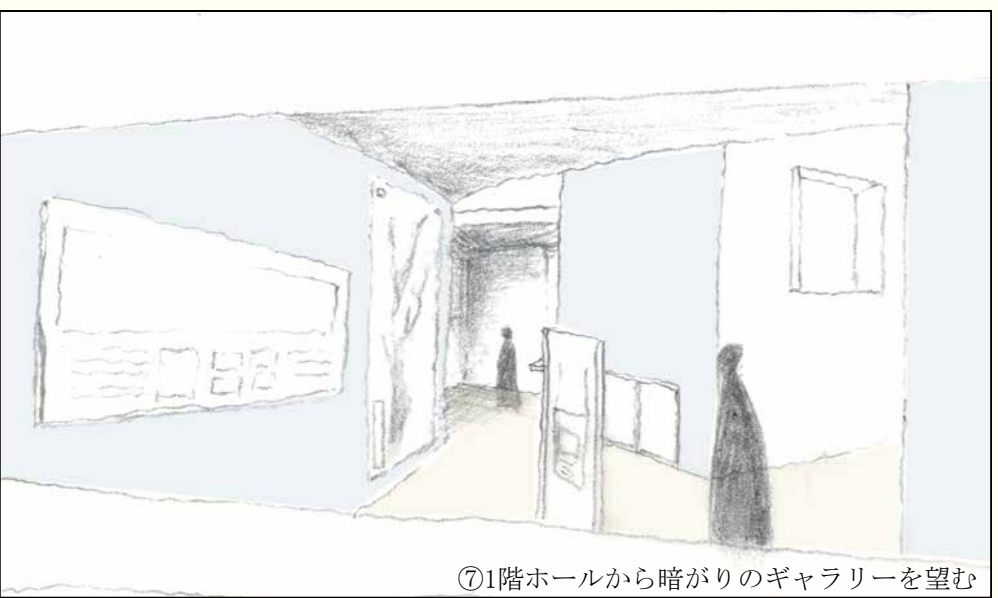
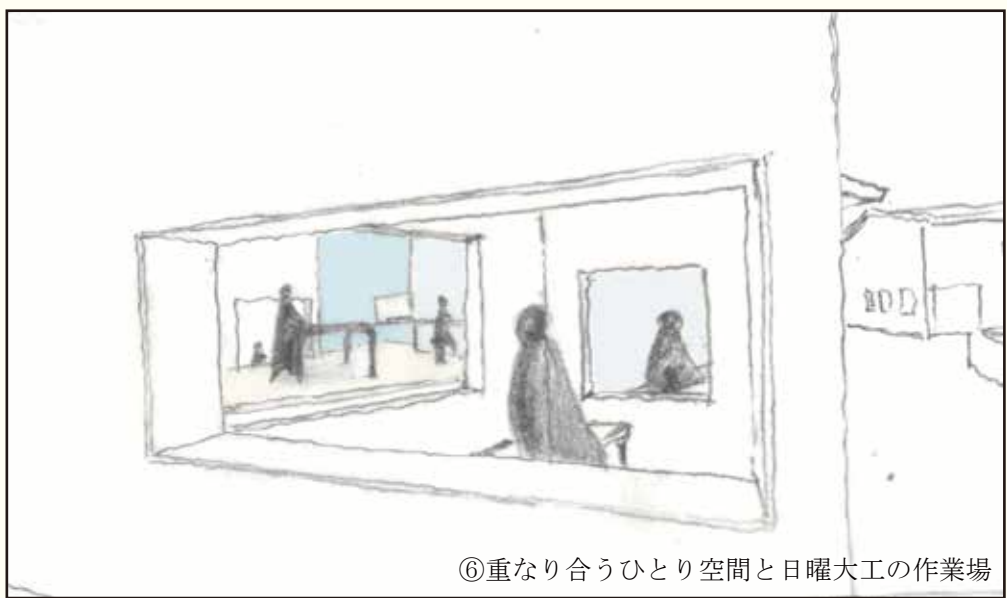
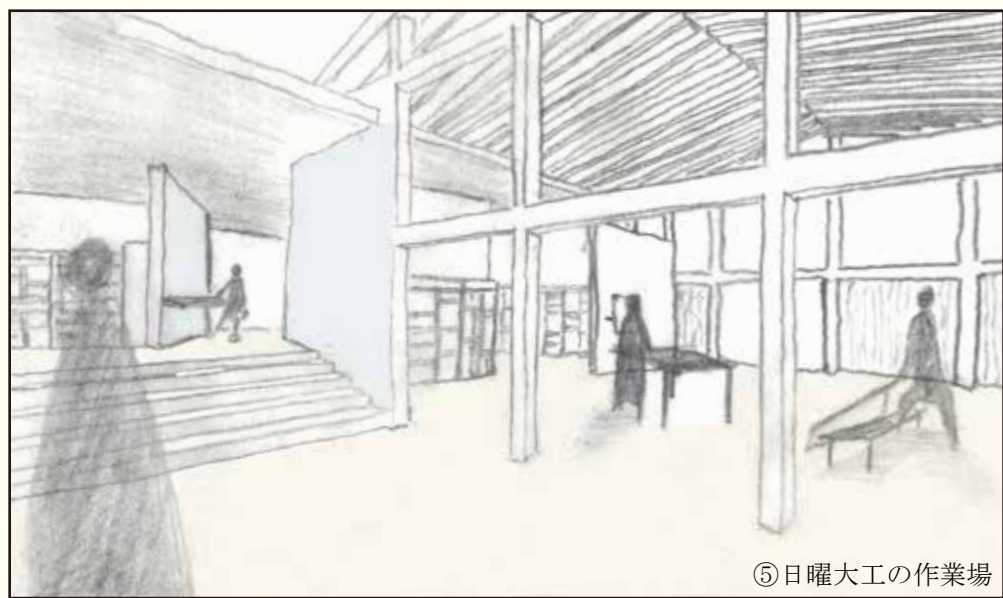
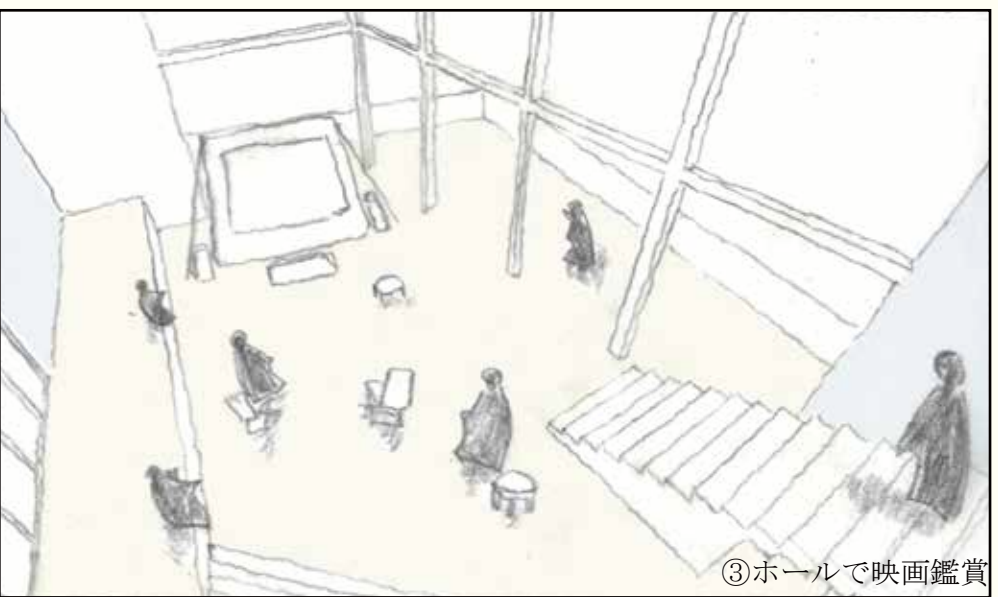
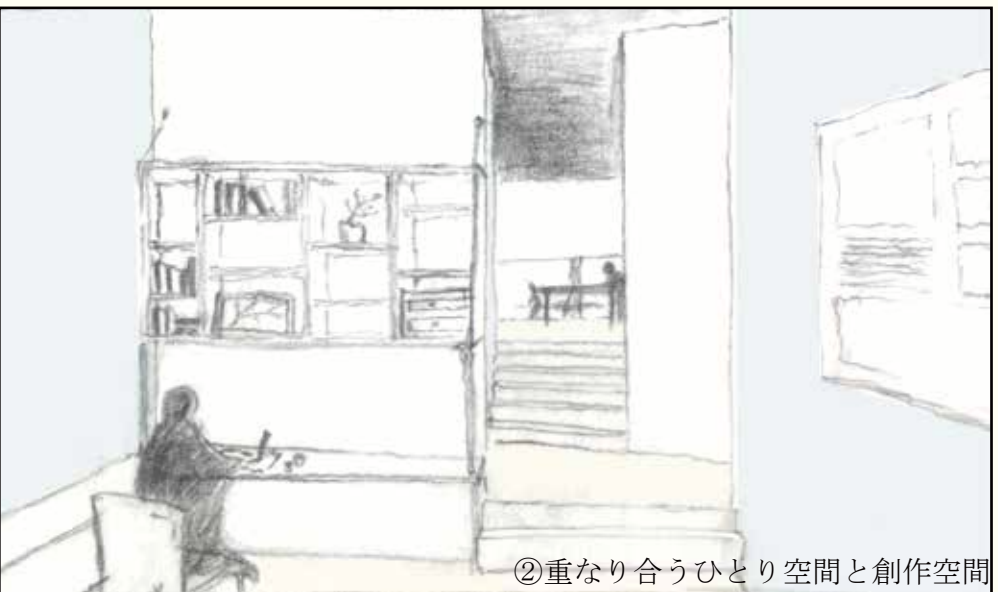
## 活動と機能の配置—遭遇するぼっち—ずの一例—

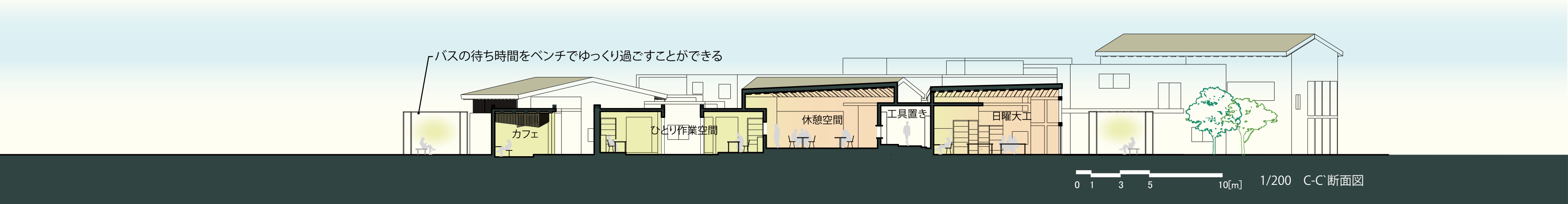
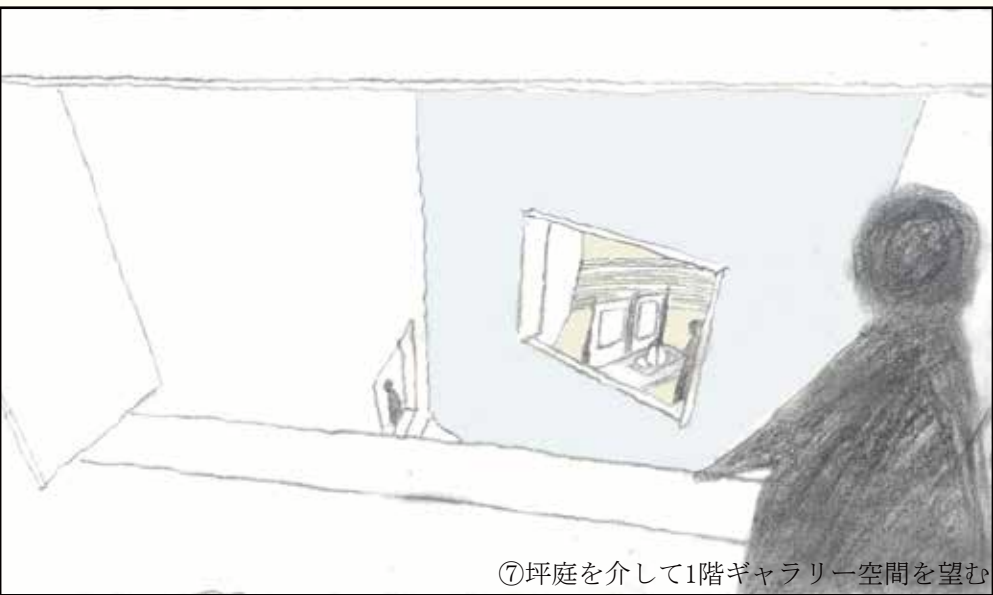
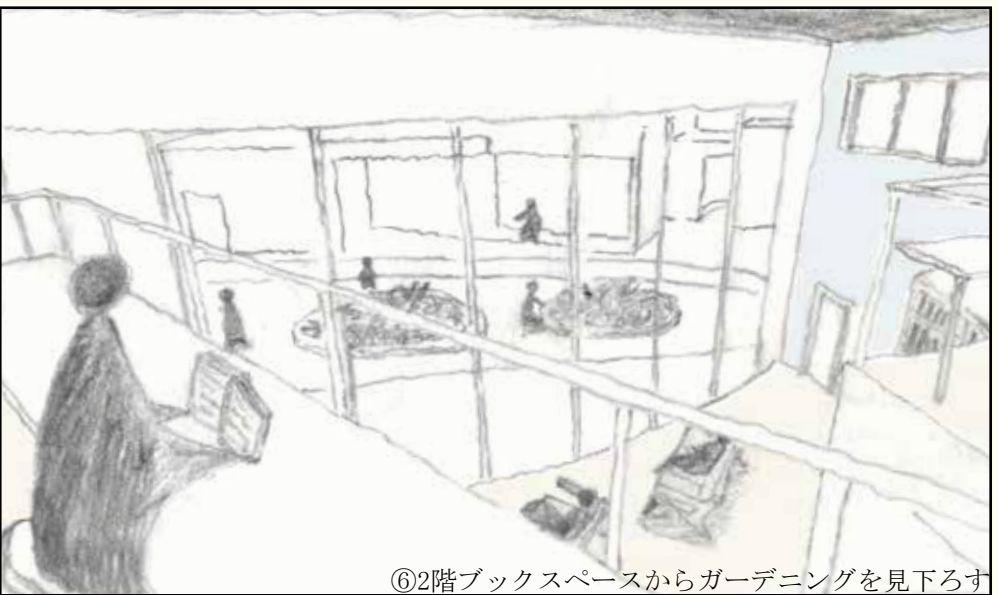
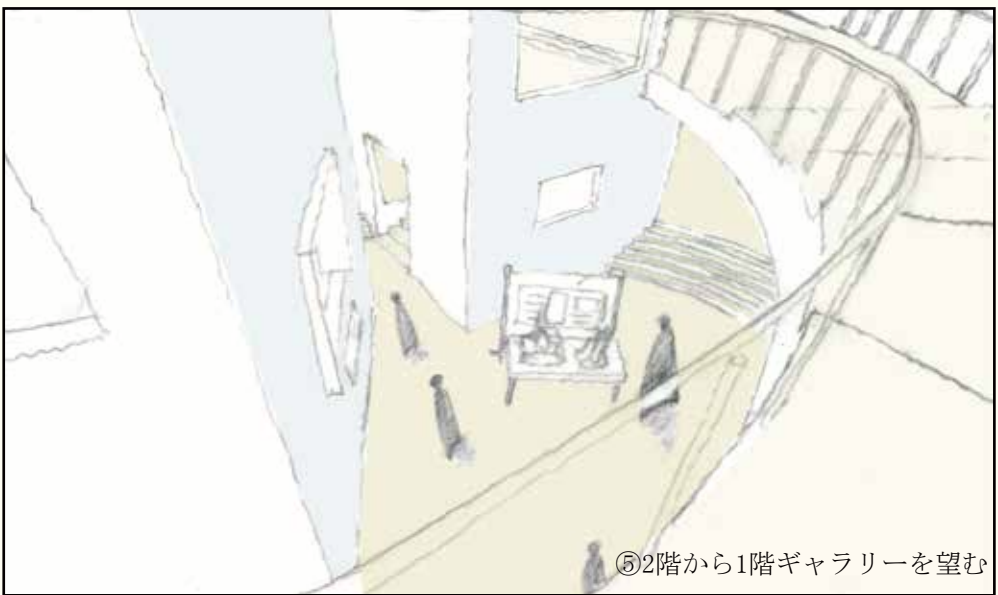
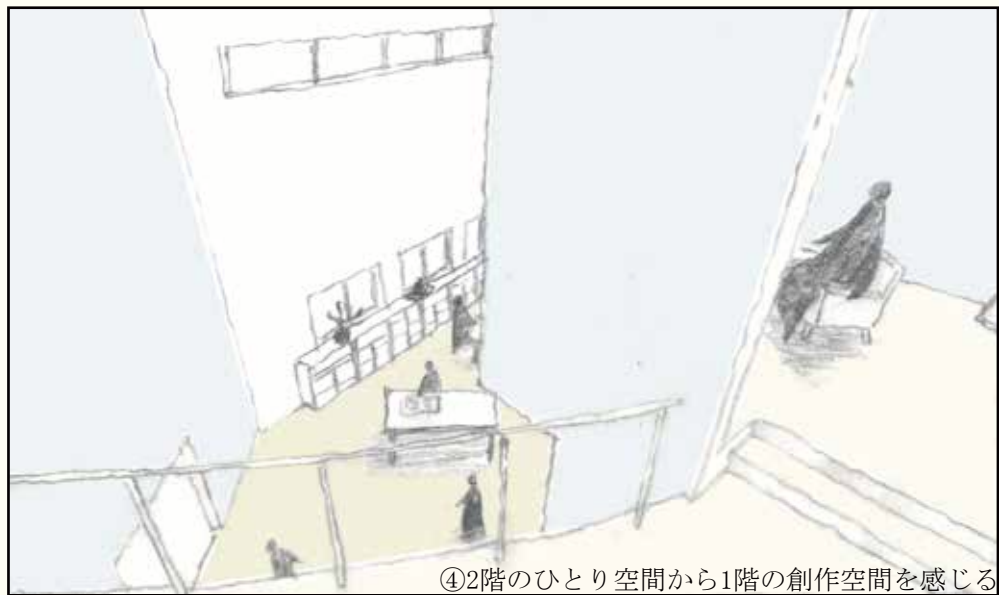
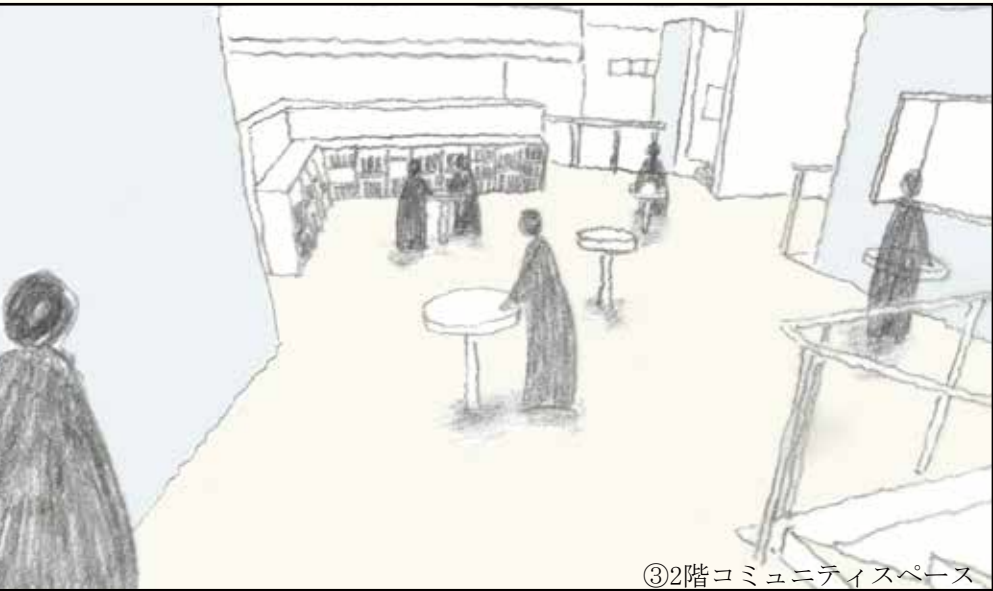


動線の随所に曲面を用いることで、  
建物内外に人を導き、流動的に人を  
巡らせることを可能にする。

## 『③住民の主な動線による曲面の配置』

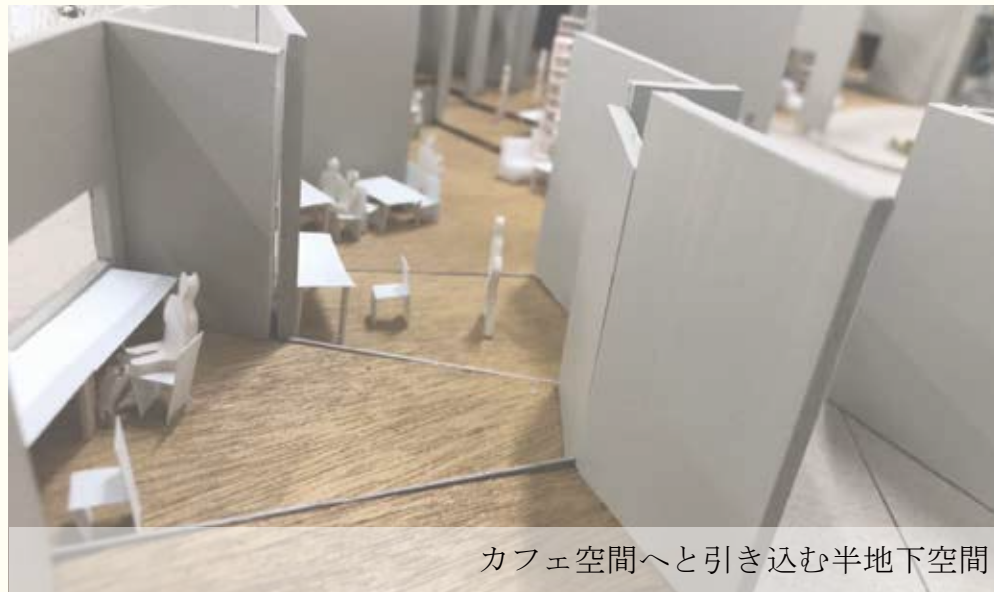








一階創作空間



カフェ空間へと引き込む半地下空間



中の日曜大工空間から広場を望む



日曜大工空間の内外のひとり空間



全体俯瞰写真

内部のひとり空間と外部のひとり空間が開口によって繋がり、ぼっちーずを形成する。内外の関係性を高めることによって建物中に誘導し、人の動きを生み出す。これによってコンセプトの一つであるぼっちを様々なひとり空間に誘導することにも繋がっており、よりぼっち同士を遭遇させやすくなっている。



ギャラリー創作空間



ホール空間



外のベンチから創作空間を望む



渡り廊下にてきたひとり空間

